

## 第7回学ぶ喜び・ESD 連続公開講座 概要報告

◇開催日時 平成28年11月11日(金) 19時～20時30分

◇会場 次世代教員養成センター2号館多目的ホール

◇参加者数 99名

◇内容

「地域とともにある学校づくり」講師：奈良市立三笠中学校 校長 石原 勉 氏



還暦を迎えたが、振り返ってみて「教員でよかったな」と思っている。

教育委員会で10年間、それから3年間で市長部局でも務め、去年から校長になっている。退職まで2年間しかないので、8か月を1サイクルとして、3年間のつもりで学校改革に取り組んできた。学校がひとつのまとまりとして機能することで、生徒の育成に力を発揮すること、現代的な教育課題と向き合う上で地域との連携が欠かせないものになっていることを紹介したい。

### 1. 三笠中学校の紹介

#### ・三笠中学校名の由来

平成22年、奈良市に3つの学校をつくったとき、市内から見える山の名前から校名をつけた

①春日中学校、②三笠中学校、③若草中学校

#### ・三笠中学校区には、公立の一中・四小・二幼があり、連携して教育を進めている。

#### ・学校行事・生徒会活動が盛んな学校。合唱コンクール

行事や生徒会活動を通して学級がまとまっていく。生徒が伸びていく。

#### ・キャリア教育・防災教育に取り組んでいる。

労働に学ぶ(13講座)：講師の話だけでなく、実際に作業も体験し、仕事の大変さや楽しさを学ぶ

※講座の企画段階で、子どもへの話し方や子どものレベルを知っているのは先生だけ。どのような作業を取り入れたらよいかなど、専門家と子どもをつなぐコーディネーターの力が先生には求められる。

職場体験(82事業所)：事前にテーマを設定し、ポスターセッションで探究したことを発表

入試対策：面接の練習(面接官は地域人材と担当教員)体験したことが実績につながっている

防災教育：地域の防災士さんと連携して、自分の命は自分で守る、避難所になった場合は

#### ・地域貢献：猿沢池周辺での清掃活動(交通標識の清掃など)、年長者のつどい、地域の防災訓練の運営に参加、もちつき大会(高齢者に配布する)などの地域行事に積極的に参加

### 2. 教育再生実行会議の第六次提言

近代工業化社会を支えてきたこれまでの教育が、21世紀、22世紀に求められる人材育成に適合するかどうか、どのような改革が必要であるのか。100年先を見据えた抜本的な改革を提言

・週15時間程度働けば済むようになる(ただし給料も15時間分に圧縮)

・第4次産業革命 日本がリードする戦略 現状ルートではじり貧(経産省HP)

- ・既存の枠組みを果敢に転換してビジネスを生み出すのか、今までの延長線でいいのか
- ・様々な企業も分岐点にある。生き延びるために変わっていく必要がある。

(1) 社会に出た後も、誰もが「学び続け」、夢と志のために挑戦できる社会へ

- ・2027年65%は、今はない職業についているだろう

→現在の教育システムは、基本的には、社会に出たときに必要とされる知識や技術を学校で修得させるもの。しかし、学校卒業までに身に付けた能力だけでは不十分であり、社会に出た後も、学び続けることにより、新たに必要とされる知識や技術を身に付けていくことが不断に求められる

- ・コンピューターと人の頭脳の対決 人間を凌駕するコンピューター

近い将来には、人工知能の飛躍的な発展により頭脳労働までもがコンピューターにより代替される可能性

(2) 多様な人材が担い手となる「全員参加型社会」へ

教育も、多様な経歴をもつ人々が、それぞれの能力、可能性を最大限伸長し、活躍する全員参加型社会を実現するものへと根本的に転換することが必要

(3) 教育がエンジンとなって「地方創生」を

少子・高齢化が進展し、地域コミュニティに多様な機能が求められる中で、学校は、人と人をつなぎ、様々な課題へ対応し、まちづくりの拠点としての役割を果たすことが求められる

→コミュニティ・スクール（以下、CSと表記）化

### 3. 奈良市教育大綱

グローバル化する社会の中で、協働して未来を切り拓いていくことができる児童生徒の育成を図る

(1) 子どもの学びを変える ～アイデンティティの形成

- ・学力の向上、キャリア教育に重点化。
- ・奈良の世界遺産や伝統文化に触れ学ぶ機会を通して、自分たちの「まち」奈良に対して誇りと愛着を持ち、自分自身のアイデンティティを形成するように支援・指導する。

(2) 教員を変える ー教員の多忙化の解消ー

- ・教員の指導力の向上とともに、教育技術をスムーズに継承し、全ての教員の資質向上を図る。



#### 4. 平成 28 年三笠中学校学校づくりビジョン

地域の方や保護者に学校の方針などをわかりやすく伝えるものとして作成した。ビジョンがあることで、地域・保護者・教職員が学校の方向性を共有できる。

##### (1) 学校づくりビジョンとその背景

- ・次期学習指導要領のポイントの一つが、社会に開かれた教育課程の実現だ。  
学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養  
主体的な学び：子どもが主体的に学ぶように教員は工夫する必要がある。
- ・複雑化・多様化した課題を解決するために、学校だけでなく地域との連携を通して解決に向かう

##### (2) これからの学校と地域の目指すべき連携・協働の姿

- ・地域とともにある学校への転換
- ・子どもも大人も学び合い育ちあう教育体制の構築
- ・学校を核とした地域づくりの推進

##### (3) これからの CS の在り方と総合的な推進方策

- ・学校ビジョンを学校運営協議会に提示し、承認をもらう
- ・保護者や地域住民を巻き込んだ学校運営を進めていく
- ・学校・地域・家庭を核に、地域にあるさまざまな資源をつなぎ、「ゆるやかなネットワーク」を形成する
- ・一中四小の学校運営協議会をつなぐものとして、CS 推進委員会を設置し、その中に学校評価部・地域連携部（地域教育協議会）・育ち支援部・学び支援部の 4 部会を置き、具体的な取組を実施

##### (4) CS を基盤とした学校教育

- ・学校運営協議会が核となり、学校運営に関して責任ある意見を述べる
- ・保護者や地域の方々へも学校運営協議会が説明する。校長だけが担っていた責任が分散する。

##### (5) CS を基盤とした小中一貫教育

地域の役割：地域の力を学校運営に生かす

家庭の役割：教育の原点に立ち返り学校と連携する

教職員の役割：自らを高め生徒と向き合う

CS の役割：生徒たちが抱える課題を地域ぐるみで解決する仕組みをつくる

小中一貫目標：「郷土を愛し、夢と希望を持ち、自分自身に誇りをもって未来を切り拓く子供の育成」

- ・地域教育協議会（地域連携部）がエンジン役として機能する
- ・学校づくりと地域づくりの同時進行 学校がマグネットとなって地域をつないでいく
- ・行事・イベント屋にならない 目的と手段を吟味して
- ・検証しながら持続発展的に 管理のサイクル（RV・PDCA）を回す
- ・中学校区としてどのような子どもを目指すのかを協議

テクニカル・スキルよりヒューマン・スキル（人間力・社会力）を中心に育てよう

郷土への愛着と自分への誇りを育てよう

##### 【地域教育協議会の取組例】

- ① ノーメディアデー メディアに接触する時間を減らして家族団らんの時間を増やす
- ② 大切な人に贈る漢字「一文字」の募集 家族で話し合う家庭の教育力の再生
- ③ クリーン・キャンペーン SKB 作戦（佐保川・菰川・菩提川）

単なるゴミ拾いではなく、大人との出会いに価値を見出す

- ④ドッジボール親善交流大会 4小学校の混成チームで中一ギャップの解消  
運営は教員ではなく地域の方々
- ⑤地域・教職員研修会、小中合同研修会（熟議）
- ⑥子ども未来会議
- ⑦なら三笠まほろば文化祭 手づくりの幼・保・小・中・地域の手作り文化イベント



【CSを基盤とした活動】

- ①年度当初の管理職と地域代表との顔合わせ
- ②三笠中学校への新着着任者対象のCS説明会  
4担（学級・教科・部活動・地域）制度の説明
- ③入学式で地域代表として挨拶  
保護者への注文・教職員を激励
- ④三笠スポーツフェスティバル 教職員と地域混成チーム

【成果】

- ①地域側から見てきたこと  
「三笠は一つ」が浸透してきた。

学校・家庭・地域が一体となり、果たすべき氏名やビジョンを共有し、協働を実践する。  
学校が地域に開かれてきた（HPなど情報開示が進む、疑わしきは発信する姿勢へ）  
学校が言いにくいことを、保護者・地域に訴求する

- ②学校側から見えること  
学校経営の土台ができている  
地域と協働する「仕組み」があることの強み  
電話対応時間の設定、修学旅行の業者選定など

5. 主体的な学びと発信する力の育成

奈良市ジュニアインターンシップ（探究型職場体験プログラム）  
課題を設定し、その解決に利する職場を選ぶ  
課題を意識した職場体験 校内ポスターセッションで発信  
探究的な学び方をすると学力も向上する

6. 生徒会憲章とユネスコ部

子どもの自主性を大切にする、自由な雰囲気为学校だったのが、変わっていた。学校が荒れる状況  
規則の見直し 学校指定の防寒着 女子の髪をくくるゴムの色の指定など

1996年5月 生徒会憲章をつくった（子どもが考えてつくった）

子どもの声をきく（不安や不満）同じ思いの人がいる。そのことを学級の意見にまとめていく  
こんな学校にしたい、という思いがある。それを子どもに提案させる。それをやりやすい順に並べる  
ことでスモールステップになってく。学校が変わっていくことを体験させ自信をつけていく。

子どもの声をよく聞くことが始まり

ユネスコ部ができた（62名）